明化の教育

７月号（第５２４号）
令和６年６月２８日
文京区立明化小学校
校長　熊倉　勝

信頼関係を築くために～相手を思いやる一言を～

校長　熊倉　勝

私の父との思い出の一コマを紹介します。

私の父は植木職人だった。植木をこの上なく愛し、雨の日を除いて植木の手入れのため仕事に出掛けていた。みんなから「親方」と慕われ、とても穏やかで、いつも笑顔であったように思う。私は、そんな父から叱られた記憶は、ほとんどない。しかし、一度だけ叱られたことがある。それは、私が中学生で体調を崩し、父とともに病院に行った時のことであった。その病院は父が庭の手入れをしている、いわばお得意様である。私が受付で、何気なく「お願いします」と言って診察券を渡したときに、珍しく険しい表情をしていた父から言われた言葉を今でも鮮明に覚えている。次のような言葉であった。

「親しくしていただいている方に『いつも大変お世話になっています』くらいの言葉が言えないのか。」

私は、「はっ」とした。人とのつながりを大切にしている父だからこそ出た言葉であり、相手意識が全くなかった自分を恥ずかしく思ったものである。

新しいプールはとても快適で、子供たちは楽しそうに活動しています。雨でもプールに入ることができ、喜んでいました。

父は職人気質で、庭をきれいにして喜んでもらえることを第一に、言い換えれば人を笑顔にするために仕事をしていたことを思い出します。今振り返ってみると、人を思いやり、人とのつながりを大切にすること、そして笑顔が人を自分自身も穏やかにすることを自分の姿で教えてくれたのではないかと感じます。これこそが、私の原点です。

また、今月の中旬に風邪をひいてしまい、かすれた声で全校朝会での講話をした後、子供たちから「大丈夫ですか。」「早くよくなってね。」と思いやりのある言葉をかけてもらいました。とても心が温かくなり、本当に元気付けられました。その後体調が回復し、翌週の全校朝会では、いつもの声で話をすることができたのですが、その時も「校長先生、風邪が治ってよかった。」との言葉かけが。このように相手を思いやるちょっとした言葉を重ねることで、人と人との心がつながり、関係がよくなるのではないかと思っています。

本校では、全校朝会で６年生の代表児童が「静心の鐘」を鳴らし、全校で教育目標を唱える活動を毎週続けています。本校で長年続いている伝統の一つです。

明化の子どもはやり通す
・やり通すこころとからだ　・人のため進んでだせることばと力　・気づき考えつくりだす力

本校の教育目標である「人のため進んでだせることばと力」の実現に向けて、相手を思いやり、一言を重ねることができる子供を育てていきたいと考えています。

１学期も残りわずかとなりました。各学級では１学期を振り返り、子供たちが自分自身の成長と課題についてしっかりつかむことができるように指導して参ります。今学期も学校の教育活動にご理解・ご協力をいただき、感謝申し上げます。